

## 「やもめの献金」

2022年05月11日

イエスは献金箱の向かいに座り、群衆がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。そこへ一人の貧しいやもめが来て、レプトン銅貨二枚、すなわち一クアドランスを入れた。イエスは、弟子たちを呼び寄せて言われた。「よく言っておく。この貧しいやもめは、献金箱に入れている人の中で、誰よりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から持っている物をすべて、生活費の全部を入れたからである。」(マルコ福音書 12章 41節～44節)

主イエスが苦難を受け、十字架の死を遂げた受難週は、エジプトの奴隷から解放されたことを祝うイスラエル人にとって最も記念すべき「過越祭」の時であった。この時、エルサレム神殿は、住民はもとより、世界に散らされたディアスポラのユダヤ人が神殿に巡礼に来て、大変な人込みであった。神殿の「婦人の庭」には、ラッパと言われた13個の献金箱が置かれていた。巡礼に来た人々は、ラッパに献金を惜しげもなく献げていた。主イエスは献金箱の向かいに座り、礼拝者がそれに金を入れる様子を見ておられた。大勢の金持ちがたくさん入れていた。このラッパの傍には、神殿関係者がいて、特別に高額な献金が献げられた時は、「〇〇の〇〇さん、〇〇シェケル」と大声で叫んでいたという。日本の神社、仏閣でも、石に高額順に献金者名が彫られているのを見る。どの宗教においても、高額献金者ありがたい存在である。ところが、主イエスの目は、高額献金者ではなく、一人の貧しいやもめの献金に注がれていた。やもめは献金箱にレプトン銅貨二枚、即ち、一クアドランスを入れた。レプトン銅貨は、最も小さな貨幣単位で、それは半クアドランスに当たる。一クアドランスは、当時一日の生活費がローマの貨幣の一デナリオンで、その64分の1である。極めて、低額な献金を献げた訳である。主イエスは、そのやもめの献金に目を止め、弟子たちを呼び寄せて言われた。「よく言っておく。この貧しいやもめは、献金箱に入れている人の中で、誰よりもたくさん入れた。皆は有り余る中から入れたが、この人は、乏しい中から持っている物をすべて、生活費の全部を入れたからである。」

この主イエスの言葉には、様々な疑問がわく。まず、やもめは本当に生活費の全部を献げたのであろうか。当時のやもめは、物心ともども恵まれない生活を強いられていたことは確かである。しかし、レプトン銅貨二枚が彼女の全財産であったのか、それを、主イエスはどのように知られたのかという疑問が残る。二つ目の疑問は、主イエスは神殿への献金を高く評価しているようだが、それは、主イエスの本心なのかである。主イエスは、神殿の祭儀に関して、関心を持っておられないように思える。確かに、「宮清め」の暴力事件を起こした時、エルサレム神殿を「祈りの家」と言っているが、今や、それは「強盗の巢」であると断罪している。更に、「この大きな建物に見とれているのか。ここに積み上がった石は、ひとつ残らず崩れ落ちる(マルコ 13:2b)」と神殿の崩壊を預言しておられる。ユダヤ人にとっては神殿が何よりの誇りで、魂の寄る辺であったが、主イエスは神殿を評価しておられるとは思えない。その神殿への献金は意味がないのではないか。やもめにはなげなしの献金をするより、美味しいものを食べ、体力をつけることを勧めるプラグマティズムは心貧しいか。献金は納得できる意味があり、確実に届くものに献げるべきである。

主イエスが、やもめの献金を弟子たちに注目させたのは、神が必ず守ってくださるという無心の神信仰を見せたかったからではないか。それ以外にはない。